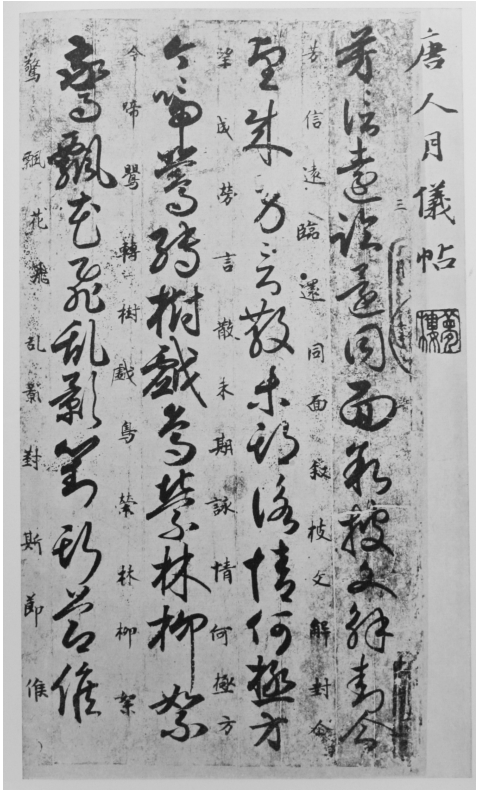
故宮本　十二月朋友相聞書

高木義隆

一、はじめに

台北の国立故宮博物院に、「唐人　十二月朋友相聞書」という古墨跡がある（図一）。小楷釈文が横についた書の手本を目的とした草書である。「月儀帖」とも呼ばれている。この作品について、紙質・本文・書風・小楷釈文の異体字の面から年代の推定を試み、原本の作者を智永に関係づける説を検証した。また、鬱岡齋墨妙本との関係を含めた伝世経路を検討した。

図一　冒頭部分



二、現状

紙本墨書。十二月各月の手紙文例を書の手本として書いたものである。紙高約二十五センチ、本紙は十幅。現在冊に装丁されている[一]。一月分と二月分の全部、五月分の殆どの部分が亡失している。前に嘉慶年間の趙秉沖の題、後に洪武丙子の解縉跋、王文治跋、安岐関係の無名氏のメモが合装されている[二]。唐人の書だと明時代初期の解縉跋以来推定されているが、その根拠が書風しかない。印記で遡れるのは金の章宗皇帝の収蔵までである。一方、よく似た作品が、萬暦三十九年の法帖、鬱岡齋墨妙に集録されている[三]。「唐人十二月朋友相聞書」と標題まで付属していて、十二月分完備している。文章は殆ど同じだが小楷釈文はついていない。この刻本のもとになった墨本は宋刻法帖からの臨本だと考える。その根拠は後述する。

三、紙質

図二　十二月朋友相聞書・孔侍中帖・李嶠雑詠　部分拡大

日本に伝世する王羲之の模写本、喪乱帖や孔侍中帖には、縦簾紙と呼ばれる、紙の漉き目のような縦線が数ミリ間隔で無数に入った紙が使われている。二〇〇八年十月十九日と二十日に台北故宮博物院で観察したところ、十二月朋友相聞書は、喪乱帖とよく似た縦簾紙だとわかった。線に沿った文字損傷も点々とみること

ができる（図二上）。しかも色も灰黒色であり、照明の関係もあるかもしれないが黄色味が殆ど無く、孔侍中帖（図二中）などに近い。隣に展示されていた陸柬之「文賦」の黄色い紙とは対照的である。写真図版では紙の色が黄色っぽくなりやすいので、図版だけみていると看過しやすい。平生壮観などの古い著録には、黄麻紙と記述されているのは不思議だ。あるいは別本があるのかもしれない。

七～九世紀の書法における空罫のある紙を縦簾紙という概念でくくることはできず、色々な種類があるようだ。本稿では「空罫」は、墨や顔料・染料で書いたのではない罫線という意味で使用する。空罫だから全て同じ性格であるわけではない。正倉院文書には折って罫をつけて書いた例がかなりあって、当時では極普通に行われたようだ。その製作法は一切推測しないで、現状の形態と状態だけから、便宜上、仮に四種に分類してみる。

Ⅰ　ここであつかう縦簾紙。約八ミリの間隔、線にそって墨落ちがあることがある。線に沿った節筆がない。模写本に用いられている。例：喪乱帖　孔侍中帖

Ⅱ　約八ミリの間隔であるが、線が全て凸で、筆があたって節筆や縦の墨線ができていることがある。筆線の断絶はあるが墨落ちなのか当初からのものなのかはわからない。例：李嶠雑詠（図二下）。なぜか日本で書かれた書跡と推定されているものに多い。

Ⅲ　二十五～三十ミリの幅である。空罫の間に書く場合が多い。節筆ができることもある。墨落ちは殆どない。例：書譜。

Ⅳ　約十ミリ間隔の空罫で、墨罫があるのに墨罫に沿って施してある。紙の損耗があることがある。空罫の間に書写してある。これは米元章のいう文字保護のための空罫なのかもしれない[四]。

例：御物　伝　賀知章　孝経

これを表にまとめると次のようになる。

表一

タイプ	例	節筆	罫間隔	墨落ち	墨罫
Ⅰ	孔侍中帖	×	8ミリ	○	×
Ⅱ	李嶠雑詠	○	8ミリ	？	×
Ⅲ	書譜	○	約24ミリ	×	×
Ⅳ	孝経	×	約10ミリ	×	○

ここではⅠタイプのみを考える。これは現存の墨跡では模写本に使われている。Ⅰタイプの縦簾紙の遺品は次の通りである。

喪乱帖（御物）

孔侍中帖（前田育徳会）

妹至帖（日本個人蔵）

十二月朋友相聞書（台北　国立故宮博物院）

千字文断簡　二種（陽明文庫）

寒切帖（天津芸術博物館）

千字文断簡は王羲之模写本とは紙質が違うが罫線の幅や性質は良く似ている。模写本のようにみえるが、精査は必要だろう。

寒切帖は、実物を観察していない。複数の写真、特に藝苑掇英のカラー写真[五]をみてそう判断した。ただ、線の間隔が十七ミリぐらいで、他より広いようにみえる。

Ｉタイプの他の例のように、この十二月朋友相聞書も少なくとも草書部分は模写本だろう。また、晋南北朝時代の楼蘭出土の残紙には縦簾紙を見つけることができなかった。ゆえに、縦簾紙の使用という点が、七～八世紀の製品である根拠の一つになるだろう。ただ、模写だとすると原本の年代はまた別の問題となる。

四、本文

上限年代を調べるため、本文テキストの成立年代を検討する。このような手紙の模範文例集は書儀と呼ばれるが、千字文とは違い、時代遅れになると破棄されがちである。日本国見在書目録でも十一種が記載されている[六]が、殆ど失われている。奈良時代には宮城県の役所にまで普及した杜家立成雑書要略も、後世にはあまり読まれなかったのか、正倉院の一巻しか残っていない。このように書儀は消耗品であり使用された期間が短いから、上限年代だけではなく、原本を書いた時代の目安にもなる。

本文を考えるとき、鬱岡齋墨妙本の十二月朋友相聞書を使って故宮本に欠けている正月、二月、五月の本文を補うことにし、故宮＋鬱岡斎本と呼ぶことにする。

この本文と類似する文章が東京台東区立書道博物館所蔵の伝トルファン出土写本のなかにある。中村不折旧蔵禹域墨書集成[七]では一三〇番「月令」紙本、残紙十五片、本紙300×2903mm という断片を巻子に貼り込んだ長巻である。この巻には三種の手紙例文集が集録されている。「相文巻一本」「十二月朝？（翰？）□聞書」「題名不明の書儀」である。そのうちの一つ「十二月朝？（翰？）□聞書」が鬱岡齋本と表題まで類似する（冒頭を図三右に表示）。各章の内容も九月と十二月を除けば似たところが多い。書道博物館本と故宮＋鬱岡斎本との文章の異同は次の通りである。詳細は表二を参照していただきたい。

- 表題　残存部分ではほぼ同じ
- 正月　殆ど同じ
- 二月　末尾を除いて殆ど同じ
- 三月　残存部分では殆ど同じ
- 四月　残存部分で異同あるも、大筋同じ
- 五月　残存部分では、末尾部分を除き四分の三以上同じ。
- 六月　残存部分で約半分の語句が同じ
- 七月　残存部分で異同があるが、大筋同じ
- 八月　残存部分で異同があるが、大筋同じ
- 九月　異文
- 十月　冒頭から河能まで同じ、書道博物館本は次の四句が多く、その後の語句は類似する。
- 十一月　末尾部分に書道博物館は違った語句と増補語句二句がある
- 十二月　異文

台湾の王三慶先生は、故宮本と敦煌写本の比較をされている[八]。それによると、敦煌写本には「朋友書儀」という書名の古書の写本があって、三部分に分かれている。「弁秋夏春冬年月日」と「十二月相弁文」と「朋友相命」である。その第二部「十二月相弁文」は手紙とその返答で構成されている。その返答部分が故宮＋鬱岡齋本とよく似ていると指摘されている。面白いことに書道博物館本と同じく九月と十二月は故宮＋鬱岡斎本とは全く違っているが、書道博物館本と敦煌本は近い（表二参照）。また、十月後半部分の故宮本と書道博物館本が違うところも、書道博物館本と敦

煌本が酷似している。

この写本はスタインに五点とペリオに六点ある。勿論、全てが完本ではなく断片も多いので、それらを総合して復元されている。

王三慶先生が使用した写本は、

Stein 5650,6180,5472,361v,羅振玉旧蔵本、上海図書館本であるが、主要なテキストは Stein5660 で

Pelliot Chinois 3375, 2505, 2679, 3466, 3420, 4989v,

が次である。

Pelliot Chinois 3375, 2505

九五三年と八九五年の年紀が敦煌本の二写本にはあるが、王三慶先生は、本文の地名を考証して、敦煌写本「朋友書儀」の「文章」は天宝年間で安氏の乱初年までのころに成立としている。ただし、この文章自体が古人の作品を編集増補したものであろうとも述べておられるから、部分的にはそれ以前に遡る。

敦煌本を抄出して書道博物館本が成立したと考えるよりも、書道博物館本が敦煌本に吸収されたと考えるほうがより自然だろう。書道博物館本テキストは天宝以前の成立だろうと考えられる。

敦煌本は返答としてバラバラに埋め込まれている部分が故宮＋鬱岡斎本に類似しているのだから、書道博物館本のほうが故宮＋鬱岡斎本に近い。また、書道博物館本のタイトルが鬱岡齋本にあるタイトルと良く似ていることも見逃せない。この書風は蘭亭を俗流に習ったような書風だから唐代前期だろうと思う。また、同時収録の詩文が梁武帝の天安寺疏圃堂詩と會三教詩、梁簡文帝の経琵琶峡詩であることも、書道博物館本の時代が唐中期以前であるという推測の傍証になる。

これらに基づいて書道博物館本の年代を唐代前半とし、よく似た文章である故宮＋鬱岡斎本のテキストが天宝以前に広く行われていたと推測しても良いだろう。すると、故宮本の模写の対象となったおおもとの原本が書かれた時期は、天宝前後より前であろう。ただ、書儀の使用期間が短いことから南北朝時代中期まで遡るとは思えない。梁の昭明太子の錦帯書は形式が似ているが語句は共通していない。偶然かもしれないが唐帝の避諱「淵」「世」「民」「治」が無いので、初唐の頃と推定している。

ただ、ここ数十年で西域出土写本のコレクションの中に偽物が混じっている事が指摘されているので[九]、書道博物館本の真偽のチェックも必要になる。

敦煌本第三部の「朋友相命」の一部と思われる一断片が書道博物館本を集録した巻子「月令」に収録されている（図三左と表四参照）。ここまで偶然は重ならないだろうから、これは書道博物館本の真正さを裏打ちする証拠とできると思う。また、「十二月朝？（翰？）□聞書」の後「問知友深患書」が途中で切れてその後別の紙がのり付けされている。こののり付けは古代に行われたもののようにみえるが、順序が間違いであり、後の紙は、梁武帝「會三教詩」の一部、「無二」から始まる。この乱丁があることからも、この「月令」が真正な写本で、おそらく裏紙を使うために貼り合わせられたものだったと推定できる。

以上の事実から、書道博物館本は真本と考えられるので、年代推測の根拠として用いて良いだろう。

五、小楷釈文

故宮本の小楷釈文は草書の左についている。こういう釈文は右につけるのが普通である。左につける他の例を捜したが発見できなかった。この伝統は本の評点を右につける慣習、さらに現在の活字本のルビを右につける慣習にまで及んでいる。

古い小楷釈文の例としては、

・敦煌将来の篆書千字文断片 Pelliot Chinois 3558 [一〇]

・萩原寺　伝空海「急就章」(弘仁三年以前)

いずれも右に小楷釈文がついている。

左利きの人が書いたのかもしれないが、このような異例は、まだ小楷釈文の形式が標準化されないより早い時代に制作されたものであることを示唆している。

小楷釈文の書風は特異で、王文治の跋を初め賞賛する人が多い。大陸の雑誌「書法」で任政という人が「大きく拡大して習ったら頗る得るところがあった」と述べている[一三]。図版ではぼやけてしまうが、現物は生彩があり模写本にはみえなかった。私は、この釈文は自運だと考えている。書風が類似する遺品としてはパリにある天宝六年の敦煌の書儀 Pelliot Chinois 2547 [一四]、虞世南の子の虞昶が監督した敦煌本写経末尾 (ACE672 Pelliot Chinois 2644) [一五]を挙げることができる。

また、王競雄先生が指摘するように異体字が多く使われている[一六]。異体字の他の確かな紀年作での用例から年代の推定を行うことができる。王競雄先生が指摘する「戯」「怨」「蝉」字の他に「辭」「希」の異体字、「帰」の別字がある。図四に主要な例を挙げた。北魏後半～隋唐時代に行われた字形である。

これらから、小楷釈文の時代もやはり唐時代前期と推測できる。すると、草書の手本に小楷釈文をつけるという形式の最古の例であるかもしれない。故宮本の明以降の模写本だと推定される冊[一七]が書道博物館にある。この本の「辞」「帰」は康熙字典体を使っている。「戯」「蝉」は故宮本と同じ異体である。模写の際に新しい標準字形が混ざる例として興味深い。

仮に、開元天宝年間に、十二月相聞書の釈文の書写年代を置くとすると、草書模写の年代も同時代か少し前だろう。珍重された書跡だからこそ模写されたわけであり、原本は当時の古美術であったと推定される。するとおそらく百年以上前のお手本だったのだろう。おおもとの原本は、王競雄先生等が推測するように智永と同時代の作品であったと推定することもできる。

六、草書の書体書風について

草書は灰色を帯びた濃墨で字画の立体感がなく塗ったような感じがする。七月と八月の下部に紙を補って字画を補筆した修理箇所があるから、後世の修理の際に補墨して全面的に塗り直したのかもしれず、そのため色が変わった可能性もある。後世の補筆をみている危険もあるが、一応そのままの字として考える[一八]。

この草書の書風については、台湾の王競雄先生が関中本智永千字文と比較し、また書譜、王羲之遠宦帖とも比較して、智永に近いという意見を提示されている[一九]。

そこで、真草千字文と共通する全ての文字を抽出して表にし、臨書しながら比較した。表は千字文の順に並べた。智永は、現代人には真草千字文を書いた人としてのみ存在する。帰田賦、淳化閣帖集録作品などは、重要視されていないからである。もし真草千字文が拓本ですら伝世していなかったら、伝世書跡の無いよくわからない書家の一人になっていただろう。従って真草千字文だけと対照しても問題はないと考える。また、十二月朋友相聞書も真草千字文も書の手本として制作された同じ性格の作品である。

谷本（小川本）[二〇]、関中本[二一]、パリにある敦煌出土貞観十五年蒋善進臨本（以下　貞観本）[二二]と比較する。まず、貞観本、関

中本、谷本が共通する部分では十五字が共通する。貞観本が末尾部分しかないので、これは真草千字文末尾三十四行との共通文字だ。この文字は千字文では末尾であるが、十二月朋友相聞書にとってはそういう意味がない。したがってかなりランダムなサンプリングだといえる。

この三本は伝世経路が違う。また、原本も違う可能性が高いから、智永とされてきた書風の幅をある程度示していると考えられる。この三本と故宮本十二月朋友相聞書を比べた。

字形も書風も同じと思われるもの、後・審・任・仰の四字のみ、字形は同じで書風が違うもの、夕・悦・顧・年。等・也の六字、字形が違うもの、扇・想・帯・聞の四字だから、故宮本は三本から離れているようだ。代表的なものをあげた図五に観るように、むしろ貞観本・関中本・谷本の類似性が際立ってみえる。

更に、関中本　谷本と共通する部分百五十六字で比較した。表五に結果を示す。

○ 字形書風とも類似するもの	六十九字
△ 字形は同じだが書風が違うもの	五十八字
× 字形まで違うもの	二十五字
? どちらともいえないもの	六字

時代・書風とも近そうだが、同一人というほど近くはないと考える。智永であって欲しいと思って調査したが、残念ながらそうはいえないようだ。

七、伝世

伏見冲敬先生が早く指摘され[二三]、近年台湾の王三慶先生が言及されるように、元時代の陸友の研北雑誌には、この鬱岡齋本の「二月」とほぼ同文を「智永　月儀献歳帖」として記載している。張雨の旧蔵で、画家で大富豪の倪瓚が当時もっていたものだった。

伯雨又嘗購得、孟子舟御史所藏、僧智永月儀獻歲帖。神品上上。其詞云「獻歲將終青陽應節和風動物麗景光輝翠柳舒鱗紅桃結綬想弟優游勝地縱賞嘉賓酌桂醑以申心玩琴書而寫志無令披聚叙會何期謹遣一介希還數字」行間細書釋文特妙。前後有明昌七印泥金題籤。今在梁溪倪元鎮家。黄長睿以為呵筆所書、即此帖也。（句読点は筆者）

この記述で注目すべき点は、

・「行間の細書釈文が特に妙」

・「前後に明昌七印があり」

・「泥金題箋がある」　という三点である。

この「明昌七印」という記述は、雲烟過眼録の記述と共に、この印についてのかなり早い記述である。また、陸友自体、書画骨董に詳しい人のようだから、かなり信頼がおける記述だろう。また、全文ではなく部分だけを記録したように解釈するむきもあるが、他の項の記述をみるとかなり長い文もそのまま引用しているので、二月分だけの断簡だと考えられる。二月分の断簡に「明昌七印」があり、故宮本の末尾にも章宗皇帝の明昌璽があるのだから[二四]、この二点は別の巻子であり、しかも同じ章宗コレクションに入っていたということになる。これを考え合わせると、もともと一巻であって、それが切られて二断片となって金の宮廷に入ったと推測できる。

一方、宣和書譜の智永の項目に「真草」と分類して「月儀」と「月儀献歳」の二点が掲載されている。これらには説明がなく題名だけなのでその実体が全くわからない。「月儀献歳」が陸友記

載のタイトルと一致するが、陸友は宣和印についてはなにも言ってないから別本だろう。あるいは、宣和書譜記載の方は、原本であって二月から始まっていたのかもしれない。「真草」というから楷書が並んでいたのだろうが、故宮本のような小楷なのか真草千字文のように同じ大きさで併記していたのかもわからない。

系統図を試作した（図六）。点線をつけたのは、もし、宣和書譜の「真草」の真が小楷なら、二月分だけが原本断片だったかもしれないからである。

明以降については、解縉の跋によると、一三九六年には、楊時敏の所蔵。その後明末までは不明。明末清初には、ある程度記録がある。顧復「平生壮観」に著録され、安岐が過眼、康熙年間に呉其貞が記録している[二五]。その後、季振直に蔵されたあと売り物として康熙三十三年に高士奇に持ち込まれている。乾隆五十三年ごろ畢沅が入手し、王文治が跋を書いている。その後、嘉慶年間に内府に入る。現在の冊に装丁された時期は明らかではないが、呉其貞が「巻」と記録しているので康熙年間以降である。

八、鬱岡齋墨妙本の位置

周天球は、鬱岡齋墨妙の原本に次のように書いている

月儀帖舊刻殘本止於八月，蓋亦人罕傳之物，此帙展之，即古色盎然，矇賈亦知其妙。無名氏重書，草法遒勁，當是名筆，此又余僅見者也。南羽丁君彙成一冊，可謂後先映發。余欲留齋中凝觀數日，南羽以掛席請歸，恐不及再睹，乃書識之。汪司馬題之次日，周天球記，時年七十有三。

この丁南羽[二六]所蔵の墨本の由来を考察する。故宮本とテキストは三カ所だけが違っている。四月の「光風漸扇」が故宮本は「風漸扇」、九月の「不任延佇」は、故宮本では「不任延想佇」。十二月の一行目の「未」のような文字が故宮本では「本」。また、草書体も良く似ている。従って同じテキストを独立に書いたのではなく、一つの源から分かれたものだと思われる。

鬱岡齋墨妙の原本について考えるとき、董其昌臨本月儀[二七]という墨蹟が参考になる（台北故宮博物院所蔵）。これは一六〇二年に董其昌が金沙の于氏のところで「古帖」をみせられたとき、唐無名氏の月儀をみつけて臨書したものである。高士奇の跋文があり江村書画目[二八]にも掲載されていて、かなり信頼がおける作品だ[二九]。これはテキストが三字の欠字、五月の末の「公一卒々不敢多具」を除いて鬱岡齋本と同じで、行立て・書体もよく似ている。董其昌の臨書としては、意外なほど忠実だと言っていい。これは鬱岡齋墨妙の原本を模写したものだろうか。実は三字の欠字を〇で明示してある。一六〇二年は鬱岡齋墨妙の刊行年一六一一年より前だから、同一本のはずはなく、別の本を臨書したものである。

ただ、同じ原本かと思うくらい類似した点が多い。十二月の一行目「本」字を董其昌は「未」と書いたが、「本」と横に書いて訂正している。鬱岡齋本などは「未」にしか読めないから、鬱岡齋本の原本と董其昌が臨写した本はどちらも草体が同じように曖昧だったに違いない。また、董其昌本の五月の末尾「已以此申懐忿卒豈敢多具」が「已以此申懐公一卒々不敢多具」となっている。「公一」は「忿」の草体を二字に分解してしまったものだろうし、「々不」もおかしい。おそらく原本の傷みが激しくて間違ったのではないだろうか。鬱岡齋本の「豈」自体かなり無理な草体である。やはり五月の「賞納」の「納」を「物」と横に小さく訂正している。文脈からいえば「賞物」のほうがよさそうだが、

鬱岡齋本をみると明白に「賞納」だ。よほど五月の部分が損傷していたのだろう。

もし、これも唐模本だったとしたら、唐模本のほぼ完本が二本も当時あったことになる。著録が盛んだった萬暦年間に記録されていないのは不自然である。

「古帖」というのは、董其昌の場合、拓本・模写本区別せずに使用しているようである。董其昌が模写した于氏のところにあった「古帖」は、少し傷んで三字が失われていた宋元の古拓本ではなかろうか。そして、鬱岡齋墨妙の原本もまた同じ法帖の一冊（こちらは傷んでない）を臨写した墨本であったという仮説を建てることができる。この仮説では、一行の字数と行立てが故宮本と変わっている理由もわかる。法帖にするとき、しばしば一行の文字数を変えるからである。

現在は鬱岡齋本の原本を観ることはできないので、その墨本を制作した時代を知ることはできないが、宋以降であろうし、法帖の臨書だとみなしたから萬暦の収集家はそれほど高く評価していないのだろう。現在、宋元の古法帖の月儀が存在しないので、あたかも唐模本のように考えてしまうだけなのではないだろうか。王世貞の弇州山人続跋に、「秘閣続帖」の「続帖第九第十」として、「唐人十二月節帖。詞既鄙瑣。書亦無雅致、但結法差緊健。中間尚可包王著周越耳。」[三〇]とあり、高士奇の跋にも王世貞旧蔵の大清楼続帖と故宮本を手元において比較したと書いてあるから、十七世紀までは何冊かこの法帖が残っていたようだ[三一]。

一方、模写本のほうは、金の章宗時代ですら、完本のオリジナルどころか、故宮本クラスの模写本の完本すら宮廷には無かったようだ。十二ヶ月分の臨本をつくることができたのは北宋以前であろう。そういう古模本だと相当珍重され題跋や所蔵印もありそうなものであるが、何もない。

私は、董其昌臨本と鬱岡齋本は北宋刻の十二ヶ月分完本の法帖「月儀」の姿を残しているものだと考えている。

勿論、臨写を繰り返した墨本二本が「鬱岡齋本の原本（墨本）」と「董其昌が臨写した古帖」である可能性もあるが、類似度が高いことから同じ原版の拓本法帖二冊と考えたほうが自然だろう。

九、おわりに

故宮本十二月朋友相聞書の制作年代は、紙質、小楷釈文の書風と異体字によって天宝以前の唐代前期だと考えられる。また西域出土文献と比較して本文の成立年代は唐代初期と考えられるから、模写された原本もそうだと推定できる。草書の書風を真草千字文と比較した結果は、智永の作品とは認め難い。また、本文補完に用いた鬱岡齋墨妙本は宋刻法帖に由来すると推定できる。

附記

杜家立成雑書要略等の書儀研究を御教示いただいた大野修作先生、空罫の御見解をいただいた富田淳先生、鬱岡齋本について御質問いただいた増田知之先生、誤謬を訂正していただいた中村伸夫先生に感謝を表したい。異体字調査に京都大学人文科学研究所の拓本文字データベースを利用させていただいた。感謝したい。

一　國立故宮博物院の整理番号は故書 000144N000000000

二　玄社、書跡名品叢刊 第一五〇回　月儀帖三種、一九八三年六月三〇日版、東京

三前掲　注二　に収録
四米元章、書史、宋元人書学論著に収録、芸術叢編第一集、世界書局、台北、一九六六年
五上海人民美術出版社、藝苑掇英　第四四期、一九八三年二月，
六矢島玄亮、日本国見在書目集證（未定稿）昭和三五年四月
七台東区立書道博物館、台東区立書道博物館所蔵 中村不折旧蔵禹域墨書集成　（中）（文部科学省科学研究費特定領域研究〈東アジア出版文化の研究〉研究成果・東アジア善本叢刊・第二集），二〇〇五年三月，東京
八王三慶・黄亮友、朋友書儀一巻研究、敦煌学、第二五輯、二〇〇四年九月、敦煌学会編集、樂学書局有限公司、台北　及び　王三慶、故宮蔵本「唐人十二月相聞書」研究、遨遊在中古文化的場域―六朝唐宋学術検討会論文集 p385-433、台湾大学中文系・成功大学中文系「六朝唐宋学術検討会」編輯小組、二〇〇四年十一月十日、里仁書局、台北
九 Suzan Whitfield (ed.) Dunhuang Manuscript Forgeries, The British Library Studies in Conservation Science 3, The British Library, 2002
藤枝晃、敦煌学とその周辺、なにわ塾草書　五一、（株）ブレインセンター、一九九九
一〇饒宗頤編集、敦煌書法叢刊、第十八、碎金、一九八三年、二玄社、東京
一一中田勇次郎編、書道藝術、第十二、空海、中央公論社、昭和四十五年
一二佐伯富、弘法大師『急就章』の奥書、書論、第六号、一九七五年五月、に赤外線写真での「弘仁参年七月」解読が報告されている。
一三任政、唐人月儀帖簡介、書法、一九八五年第四期、上海書画出版社、上海
一四饒宗頤編集、敦煌書法叢刊、第一三巻、書儀、一九八六年、二玄社、東京
一五前掲　注十
一六王競雄、芳信遠臨―唐人十二月朋友相聞書書法述介。故宮文物月刊、三百七号、八十九～九十四頁。二〇〇八年十月、台北
一七孔固亭鑒眞第四、孔固亭真跡法書刊行会、昭和九年九月十日
一八神戸大学　魚住研究室の色分析による研究を期待する。
一九前掲　注一六
二〇国宝　真草千字文、一九七九年、便利堂、京都
二一宋搨真草千字文　智永、二〇〇六年、西泠印社出版社、杭州
二二前掲　注十
二三伏見冲敬、月儀帖三種、書品、第一三九号、昭和三八年四月、東京
二四故宮本の明昌印の信憑性は高いと考える。他の明昌七印の遺例と比較して調査中だが、詳細は述べない。
二五呉其貞、書画記、遼寧教育出版社、沈陽　二〇〇〇年一月一日。ただし、書画記は「一，二，三月が欠けている」と記録している。これは別本ではなく、抄本の誤写ではないかと考える。高士奇も董其昌臨月儀の跋に「一，二，五三月が欠けている」と書いていて、この三は三ヶ月の意味である。これは紛らわしく転写で誤りやすい。
二六丁雲鵬（一五七五頃―一六三八）　画家　版画下絵も制作
二七國立故宮博物院、故宮の書寶、第三十九巻、明二一、東京産業貿易株式会社、昭和六一年十月再版（昭和六十一年三月初版）
二八江村書画目、東方学会印行、一九二四年
二九模倣作であるという意見もあるが、賛同し難い。それに、模倣者が使った「古帖」についても、同様の議論が可能だろう。
三〇弇州山人続跋、書苑、第四巻十号、三省堂、東京、一九四十年十月、東京
三一國立故宮博物院（台北）に、秘閣帖十冊がある。第六に唐人月儀が収録されている。鬱岡斎本と酷似している。他の集録帖は文献とは合わず、偽帖だと思われるので資料としなかった。